八戸工業高等専門学校図書館
NEWS LETTER
R5年度第1回　R5.11.
発行：マテリアル・バイオ工学(C)コース八戸高専図書委員

『満願』
米澤穂信

（C4　沼田 春海）

この本は、交番勤務の警官、恋人との復縁を望む男、美しい中学生姉妹、在外ビジネスマン、フリーライター、弁護士などが遭遇する6つの奇妙な事件を収めた短編集です。
自分もじわじわと追い詰められているような感覚に陥るほどの文章力や、リアリティのある登場人物の描写、読んだあとに残るじめっとした余韻、どこか不気味で歪んでいる生々しい情景や、温度感がはっきりと伝わってきます。文中に伏線がさり気なく散りばめられていて、結末がわかると謎がとけた爽快感とともに、恐怖や気持ち悪さでゾッとする感覚が味わえるのもこの本の醍醐味です。ぜひ読んでみてください。

『君が夏を走らせる』
瀬尾まいこ

(Z5 北上 茉依)

ろくに高校に行かず、かと言って何も夢中になるものがなかった高校生の大田。そんな中、先輩の子供のベビーシッターをすることになる。1歳の女の子を1ヶ月の間世話をする中で様々なことに振り回される。しかし、親も知らないその子の成長を目にする大田は、きっと忘れられない思い出になる。しかし、1歳という歳の子供は忘れてしまう思い出かもしれない。
子守りに手こずる高校生の様子や、女の子の可愛さ、この組み合わせのギャップがたまらないくらい愛おしく、涙があふれるような本になっています。

『むかしむかしあるところに、死体がありました。』
青柳碧人

（C3　越川 葉澄）

容疑者は一寸法師！？竜宮城で密室殺人！？
殺人現場と化した昔話の世界。醜くて、狡猾な登場人物たちがさまざまな事件を引き起こしていきます。昔話の世界観をそのままに、しかし登場人物が猟奇的な殺人犯に仕立て上げられていて、みなさんの昔話のイメージが完全に覆される一冊になると思います。収録されているお話は全部で5話。『一寸法師』『花咲かじいさん』『鶴の恩返し』『浦島太郎』『桃太郎』をそれぞれベースにして描かれています。
ぜひ、昔話のキャラクターたちにだまされてみてください！

《先生からのおすすめ》

『オイディプス王』
ソポクレス

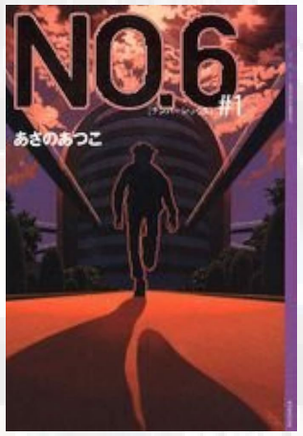
（G科・助教　佐伯 彩）

「先生に本を紹介していただいてもよろしいでしょうか？」図書委員の人にこう言われ、気の向くままに了解してから、ちょっと後悔しました。こちらで授業するようになった当初は、学生の読解力や読書量を把握していなかったので迷わずに選ぶことができました。しかし、こちらで働かせてもらうようになり、学生の読書力の現実を直視するようになりました。そうした人たちにも興味をもってもらえる本を選ぶということになるとかなり難しいものですね。
　さて、そうして迷いに迷ったうえで私が皆さんにご紹介したいのが、ソポクレス作『オイディプス王』です。皆さんはソポクレス(紀元前496-409年)という人物をご存じでしょうか。ソポクレスは紀元前496年頃に生まれたギリシアを代表する劇作家です。ちなみに、ソポクレス、エウピリデス、アイキュロスは、高校2年生の世界史にも紹介されている古代ギリシアを代表する三大劇作家です。彼らの作品はドラマ化や映画化、舞台化もされるなど現在でも幅広く親しまれています。彼らの作品の特徴は、全て「悲劇」である、ということです。ただし、「悲劇」というのは、メソメソ、ウジウジしてみていてつらくなる…、という意味ではなく、人は運命に立ち向かおうとするけれども所詮その運命に弄ばれる…、その様を描いたものである、と考えた方がしっくりくるかと思います。また、この本はページ数でいえば110頁と短編小説ほどの戯曲(脚本的な読みもの)になります。そのため、基本的にセリフをどんどん読んでいけば、1週間以内に読み切れてしまいますので、軽く読むにも、深掘りするにも都合の良い本です。
　次に本の内容です。太古の昔、テバイの王ライオスのもとに子どもが生まれました。しかし、その子は神託により父を殺し母と交わるだろうことが予言されます。ライオスは、自分の命を守るため自らの子の足を傷つけ、山中に捨てさせました。しかし、その子どもは運よく山中で拾われコリントス王ポリュボスのもとで育ちます。その子ども、すなわちオイディプスは順調に成人し、コリントスの王子として豊かな才覚を持った人物に成長しました。しかし彼にも神託が下りるのです。「お前は父を殺し、母と交わるだろう・・・。」と。オイディプスはコリントスを離れます。そして、旅の途中に無礼な態度をとった老人一行を殺してしまいます。それが実の父、ライオスとも知らずに…。そして、テバイにやってきた彼は紆余曲折を経て、ライオスの妻イオカステを自らの母とも知らずに妻としてしまうのです。
　この作品は、多層的に読むことができます。娯楽として読むこともできますし、私の大好きな心理面から読むこともできます。例えば、心理学の先駆となったジークムント・フロイトは、(この学校の男子諸君は当てはまるかどうかはわかりませんが)男児が最初にみた女性である母に性愛的感情を抱き、同性である父に敵意を向ける…、という情動を「エディプス・コンプレックス」と名づけました。そう考えると、皆さんと親との向き合い方や自立にも関わってくるかもしれませんね。

八戸工業高等専門学校図書館
NEWS LETTER

『No.6』
あさのあつこ

（L4　小川 月羽）



この世界に建設された6つの理想都市の一つ、「No.6」。争いごとや飢餓がなく、人々が穏やかに過ごして行ける場所。学習環境や衣食住すべてにおいて完璧に管理され、人々の安全は保障されている。しかしその外側は、殺戮が繰り返され、食べるものも満足に得ることのできない場所。そんな外側の世界から来た謎の少年・ネズミと理想都市No.6で生まれ育った主人公・紫苑は出会う。友情というにはあまりにも激しく、宿命というにはあまりに切ない二人の物語。二人の出会いと成長、そして襲い来る過酷な運命を描いた作品です。
全9巻もあるSF小説ですが、読む手が止まらずどんどん読み進めることができました。漫画や、アニメ化もされているので興味のある人はぜひ手を伸ばしてみてください。

『言葉にできない想いは本当にあるのか』
いしわたり淳治

（C5　狄守 響子）

「言葉にできない思い」、つまりこの歌詞を書いた人は日頃自分の感情をすべてを言葉にできているのだろうか―。ロジカルな歌詞分析が話題の作詞家・いしわたり淳治が音楽、テレビ、広告の気になるフレーズを独自の視点で解説する〈言葉〉にまつわるコラム集。
みなさんは著者のいしわたり淳治さんが八戸高専の卒業生だと知っていましたか。在学中にロックバンドSUPERCARを結成、97年にシングル『cream soda』でデビュー。解散後は作詞家・音楽プロデューサーとして活躍しています。
すっきりとした文体・構成で本が苦手な人でも読みやすく、高専生のみなさんに１度は読んでみて欲しい一冊です。SUPERCAR1stアルバム『スリーアウトチェンジ』もおすすめなので、ぜひ本と一緒に彼の〈言葉〉の世界を味わってみてください。

『きみの存在を意識する』
梨屋 アリエ 著

（L3　種市 秋悟）

中学2年生の5人の語りで展開する短編連作です。
それぞれ、発達性読み書き障害、LGBTQ、過敏症など、外からは理解されにくい悩みを持っています。
そんな中で、葛藤しながら成長する姿が描かれています。一つ一つの話の続きが気になる終わり方なのが魅力です。この本を読んだ人には病気・障害の種類、内容を知ってもらうのはもちろん、自分の中にある知識だけで人や物を完結させる人にはならないようになって欲しいと思います。興味のある人は読むことをおすすめします。

『私が大好きな小説家を殺すまで』
斜線堂有紀

（C2　佐藤 光子）

この作品は人気小説家の遥川と遥川に命を救われた少女、梓が共同生活をするお話です。梓は遥川の小説を愛していましたが遥川が小説を書けなくなったことをきっかけに二人をめぐる関係はだんだんと崩れていきます。尊敬する存在を失ったとき人はどうなってしまうのか、とても考えさせられました。少し重い内容ですが、読み始めると止まらなくなる作品です。いつ、どちらが殺したのか、この作品で言う「殺す」とは何なのか、少しでも気になった人はぜひ読んでみてください。

『AI vs.教科書が読めない子どもたち』
新井紀子

（Z4　祐川 和奏）

「Siri」、「ChatGPT」。近年、「AI」を耳にすることが増えている。将来、AIに仕事を取られるという予測も誰もが聞いたことがあるだろう。すでに「東ロボくん」はMARCH合格圏内に到達している。AIがすでにライバルとなっている今、私たちは抵抗しなくてはならない。「東ロボくん」を育てた数学者、新井紀子が、最悪のシナリオと教育について提言する。これからAIに使われるのか、AIを使う存在になるか。高専生として、ぜひとも読んでほしい。

『怪物のゆりかご』
遠坂八重

（Z3　小笠原 大斗）

ある日突然公開された、不可解な自殺未遂動画。
その動画の中で血塗れの男子高校生は事件の加害者たちを告発していた。
二人組の高校生がこの難解な事件の真相にたどり着くため、次々と謎を解いていくミステリー小説です。物語を読み進めていくうちに自殺未遂をした男子高校生の周りの人間関係が明らかになっていき、最後に分かる物語の意外過ぎる黒幕に驚愕します。物語を読んでいくうちに何人もの人の凄惨な過去がつながっていくのが面白いです。是非読んでみてください。

『どこよりも遠い場所にいる君へ』
阿部 暁子

（Z2 新田 真子）

知り合いの居ない環境を求め、離島の高校に進学した主人公、彼はある秘密を抱えていた。ある日主人公は「この島には神隠しに遭う入り江がある」という話をクラスメイトから聞いた。夏の初め、気になって向かった『神隠しの入り江』で出会ったのは、気を失い倒れている少女であった。同い年の16歳で身元は不明。そんな彼女が呟いた「1974年」の意味とは…。この本は、小説が苦手な人でも読みやすく面白い内容になっています。この話には続きがあるので、ぜひ一緒に読んでみてください。